

平成 23 年度 「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」 研究開発領域
第 1 回領域シンポジウム パネルディスカッション 2

生涯安心して自分らしく住み続けられるコミュニティとは
ー日本におけるエイジングインプレイスを考えるー

モデレーター：秋山弘子
(領域総括／東京大学高齢社会総合研究機構 特任教授)

コメンテーター：大島伸一
(領域アドバイザー／国立長寿医療研究センター 総長)
冷水 豊
(領域アドバイザー／日本福祉大学大学院 客員教授)

パネリスト：太田秀樹 (医療法人アスミス 理事長)
小川晃子 (岩手県立大学社会福祉学部・地域連携本部 教授・副本部長)
新開省二 (地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター研究所)
中林美奈子 (富山大学大学院医学薬学研究部)

※発言者の敬称略

■ディスカッションの概要

(秋山)

後半はエイジングインプレイスがテーマである。まず先生方には、現在のプロジェクトを通して、コミュニティでのエイジングインプレイスを実現するにはどのような展開が考えられるのか、プロジェクト間の連携なども念頭に置きながらお話をいただきたい。

(小川)

エイジングインプレイス・地域居住では、高齢者の変化やニーズに合わせてケアをフレキシブルにデリバリー出来るシステムづくりが必要になる。私たちが取り組んでいる高齢者の異変を早く確実に把握できる仕組みというのは、このニーズの最初の部分をキャッチできる。これと緊急通報装置を組み合わせ、エイジングインプレイスのための仕組みづくりを目指している。それからケアを提供する仕組みとしてフォーマルケアとインフォーマルサポート、地域の互助機能の組織化があるが、おげんき発信を道具にして、コミュニティの中で繋がりを創ろうとしている。他のプロジェクトとの関係では、見守りはやがて看取りに繋がると思っており、太田先生の地域・在宅で看取るという仕組みとは、つながりがあるのではないかなと考えている。

(太田)

どこで死にたいか、それを選べるということが非常に重要である。在宅医療とは、暮らすということが上位概念にあり、そこに過不足なく医療をアウトソーシングしているという形だと理解していただきたい。では療養生活は誰が支えるのか。キーワードとして地域連携と多職種協働である。誰が在宅医療のオーガナイザーになってもよいと考えている。ただ在宅医療を推進している全く対極にあるのが病院である。病院があれば安心と思っている方もいる。しかし、病院があれば皆健康になるのか、皆幸せになるのかというと、そのへんはよく考えなければならない。在宅医療を推進していく非常に重要なステークホルダーと、足を引く因子もあるということを伝えていきたいと思う。

(新開)

寿命の中に占める健康寿命の割合を増やす、これが超高齢社会に求められるのではないかと考えている。私のプロジェクトではその力をコミュニティに求めることは出来ないかと考えている。コミュニティの力で、特にエイジングインプレイス、在宅で元気な状態を如何に長続きさせる、そういう社会システムをどう作るのか。これまでの健康教室には一部の比較的健康的な方しか来ない。後期高齢期になれば来られない人もいる。そこで自宅の通える範囲で参加できる健康作り場が必要かなと。これを3つの地域で取り組み、後に残せるような成果を創出していきたい。

(中林)

私のプロジェクトでは、虚弱になっても歩いて生活のできる歩行圏コミュニティの形成目指しているが、その特徴は、歩行補助車という杖よりも安全で安楽な歩行器を使うという点にある。現在の健康教室では、高齢者本人の努力をベースとした対策が多く取られているように思うが、加齢に伴う限界がある。そういう時の選択肢として考えている。しかし、慣れないもの、周囲があまり使っていないものを使いたくないという心境が高齢者の方にはある。そこで高齢者本人、それから周りの人の意識を変えることによって、道具を使って楽に歩くという環境を創り出す。そういうものがエイジングインプレイス実現の大事な要素ではないかと思っている。

(秋山)

これから立ち上げるころなので、他プロジェクトとの連携はまだあまり考えられないのが現状のようである。次に、この領域の特徴としてマルチステークホルダー、つまり多様な関与者があげられる。そうでなければコミュニティの課題は解決できない。しかしここが非常に難しい。次回の公募に応募を考えている方も、そのあたりが大きな課題になっているのではないかと。誰と組んでどういう体制を作るのかと。それを実際に走り始めているプロジェクトで、どのような苦労をされたのか、それからこういうアクションを取ったらこういう失敗をしたとか、こうするとうまくいったということを具体的な例をあげて少しお話いただきたい。

(新開)

まずは、プロジェクトで連携する多様な関与者の方との信頼関係がない中で、こういうことをお願いしたいと、なかなかそれは通らない。そこで、その話がうまくいっていないということをお首長に伝えながら打開策を見出していくという、トップダウン的なやり方に今まではなっている。そういうやり方もあるのではないかと。もう1つが、地域で事業を進めるに上での本当のステークホルダーは誰なのかということをお広く募集する時に、これは現場の方にしか分からないので、その方の視点で自主的に集めていただくと。コミュニティ会議などは出来るだけ地元の方の目線で、こういう内容でやってはどうかという方を集めているというところである。

(中林)

私は保健師をしていた経験があるが、地域づくりには、行政と地域住民組織の会長に入ってもらうのがいいのではと思います、その2つを押し寄せてきた。とにかくフェイストゥフェイスで会ってもらい、自分たちがやりたいことを、行政の方にも地域住民の方にも話した。それから話を聞いてもらうために、できるだけ具体的な話をしたということがあった。つまり、1つはフェイストゥフェイス、その後はとにかく会える機会を作った。もう1つが、地域の住民組織の方には無償のボランティアではなくて、一つの職として関わってもらうことにしたことにより、協力を得やすくなったと思う。また富山は現在コンパクトシティに取り組んでいるが、それがこの歩いて暮

らせるというプロジェクトにフィットしたということも運がよかったと思う。

(秋山)

アクションリサーチには、思わぬハードルがたくさんあるが、それと同時に思わぬチャンス、資源を見つけることもある。実験室の研究と全然違う。苦労もあるけれども面白さもある、そういう面も含めて小川先生も色々と苦労されていると思う。

(小川)

最初にマルチステークホルダーの体制を作り上げるときには、岩手県や岩手県社協とパートナーを組めるようになるまで、すこしずつ川井村という小さな地域で進めてきた。時間も非常にかかったが、そういう取り組みによって、大変いい体制が立ちあがったはずだったが、震災が起きてしまった。ただし、おげんき発信をしていたために、地震の直後に滝沢村の民生委員さん達も足を運んで確認をしたという事実もある。現在は4フィールドで取り組んでいるが、これが大変よかったのが、4つのフィールドの人たちがお互いに刺激し合うという点である。ある地域でサブセンターが立ち上がれば、それを聞いて他の地域でもサブセンターに取り組もうと。こういうところは複数のフィールドを持ちながらやっていく実証実験の思わぬ成果であった。

(太田)

医師会と行政をどう口説くのかということが大きい。県を突くと市町村が動くということが分かった。その際に、メディアの力がものすごく大きい。地方紙だが、メディアの人たちに相当助けられた。地方紙で私の取り組みを見たところある議員の方たちが話を聞きにやってきましたというの、ひょうたんから駒というような話だった。

(秋山)

いろいろ苦労があり、新しい発見がある。互いに参考になると思うし、会場の参加者にも参考になると思う。あとは2人のアドバイザーの先生方にコメントをいただきたい。

(大島)

私はアクションリサーチというのが一体なにかということとはよくわかっていない。ただし、直感的にこれは日本の現状に合った素晴らしい研究だし、何としても続けていただかなければならないなと感じた。現在日本は高齢大国だが、一体何をやるのか。結論から言うと、今研究で進めているまちづくりコミュニティづくりだろうと思う。高齢化になっていったらどういう社会を作っていくのか。言葉でいえば長生きを喜べる社会、長生きを歓迎できるような社会。それはどういう社会かという、最期どこで生活するのかというような話に行きつく。しかし世界中どこにもモデルはない。片一方で資源は有限で、今までの日本の状況を考えれば、個人のニーズが膨らんでいく。そのなかで、どういう選択をしなければならないのかということは間違いなく迫られてくる。そうすると、どこで何をしなければならないのかという、やはり地方しかない。地方の実際に目の前で顔が見えるところで、どういう町づくりをしていくのか。色々な形で日本の再生の姿が出てくるのではないかと。この RISTEX の研究というのが、その一番基本の部分になっているのではないかと考えている。

(冷水)

この領域のテーマにあるコミュニティをどうとらえればよいのか。私はまず地理的な景観を見る。それから住民同士の付き合いの問題、ふれあいの問題というのが、ケアの問題にとって非常に重要なことだと思う。人々の付き合い、いい面も悪い面もあると思うが、そういう付き合いの

違いというのがコミュニティの非常に重要な要素だと思う。それから行政の積極性・特徴、地域のリーダーなどが、研究を進める上で非常に重要だと思う。このプロジェクト全体に対してお願いしたいのは、各地域に対して、インプレイス（安心していきいきと生活できる場）を取り巻く諸要素の特徴を出来るだけ具体的に明確にしてもらいたい。それから研究方法に関連して、実証的な研究というのは個人を対象にデータを集める。しかし、それで描けない集団とか組織とか地域そのものを面として捉えるような研究方法を、個々のプロジェクトだけでは難しいので、アドバイザーと各プロジェクトのメンバーが協働して、開発していくという、非常に大きな課題があるのではないかと思う。

（秋山）

今回が初めての領域のシンポジウムである。まだ立ちあがって数カ月のプロジェクトと1年数カ月のプロジェクトなので、出来たものではなくて、プロセスを報告するという内容が多かった。その中で、色々な苦勞や、評価の方法などの話もあったが、そういう話を伺えたのはとてもよかったと思う。先ほどアクションリサーチという言葉が出てきたが、まだ研究方法として確立していない。これからの社会において重要な介入方法であり、これをどうにかして研究方法として確立したい。これが第一歩のお披露目会であり、中間報告だと位置付けてもらいたい。

また日本には、色々とまちづくりの事例があるものの、それがモデルとなって外に出ていない。人口の高齢化はローバルな現象なので、日本だけではなくてどの国も大きな町も小さな町も困っている。私たちはまだ出来たものを発信する段階ではないが、これからそういうものも含めて取り組んでいきたい。今後ともよろしく願いいたします。

今年3回目の公募を実施するので、関心のある方からの優れた提案をお待ちしている。どうも本日はありがとうございました。

（以上）